

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

首里王朝の言語（１）：人称代名詞の形成と発展

著者	中本 正智
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	4
ページ	137-152
発行年	1978-11-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/12105

首里王朝の言語(1)

— 人称代名詞の形成と発展 —

中 本 正 智

1. 首里方言の形成

首里方言は琉球方言の中では共通語としての地位にある大方言である。首里方言は、かつては日常語としてばかりではなく、古典劇においても、現代劇においても戯曲語として用いられ、南は八重山と那国から、北は奄美大島にいたるまで多くの島の人々に親しまれてきた言語である。

この首里方言が、いつごろ、どのような過程で成立したかについては、沖縄研究の中で重要な問題であるにもかかわらず、いまだ明らかにされていない。この大きなテーマは、一個の論文で論じつくせるものでもなく、個人の能力で解明できるものでもないが、ここに問題提起の意味を含めて、人称代名詞について、いくつかの言語学的な事象を提示し、その解明の手がかりを得ようとするものである。

普通のいわゆる共通語が中央政権の推移と発展に左右されて生まれてきたように、首里方言の形成は琉球王朝の発展の過程と平行してなされてきたものと考えられる。

琉球王朝は周知のように短期間に生まれたものではない。その形成の淵源は、11世紀末頃にもさかのぼることができよう。

11世紀末頃から各地に按司という支配者があらわれ、終期の三山分立とその統一に代表されるように、支配者間の抗争を経て、1429年(永享1)年に尚巴志によって沖縄全島が一つの政権下に統合されることになる。その後も幾多の曲折を経ながら、総仕上げ的に尚真王の1477(文明9)年から1526(大永6)年の在位

50年間に首里王朝の中央集権が確立される(注1)。首里方言は、この首里王朝の中央集権への足どりと平行して形成されていったものと推察される。

なかでも、特筆すべきは尚真王時代に、これまで地方の領地で分立していた按司たちを、その武装を解除して首里に住まわせたことである。これによって中央集権に付随して身分制度も確立され、首里方言はこれらの制度に対応する言語として、たとえば士族語と平民語の別および敬語法についてみられるように複雑なものへと発達していったであろう。

現在の琉球諸方言と首里方言を比較検討してみると、首里方言の基本は尚真王の時代に確立されたのとみるのが適当であろう。

首里方言の母体がどのような地域の方言であったかということについては、いまのところ地域的に確定することはむづかしい。とはいえ、首里方言の特徴にはある傾向がないでもない。たとえば、首里方言のアクセントをみると、佐敷・知念・玉城にひろがる一つの大言語団のアクセントに類似し、那覇などの周辺語のアクセントとは異なっている(注2)。また首里方言は有気喉頭化音と無気非喉頭化音の対立がない点、那覇方言や沖縄北部方言とは異なる。このように首里方言は沖縄中南部の方言、なかでも東海岸の方言とつながる特徴を多くもっている。

こうみえてくると、首里方言は沖縄中南部のある方言を母体とし、周辺言語をかかえこみながら、これに本土語の影響を強く受けて形成されていった可能性が大きいといえよう。

2. 父の言葉と母の言葉

伊波普猷先生は著作の中で「父の言葉」と「母の言葉」という用語を使って、琉球方言の中にみられる言語的な受容の層に言及しておられる。かいつまんで言えば、院政時代以後に九州からの侵入者のもたらした言葉は「父の言葉」、侵入以前の本来の言葉は「母の言葉」というのである。

たとえば、琉球方言で「使役の表現」として、kakafimijun（書かせる）とkakasun（書かせる）の両形がある。両形の助動詞のうち、前者の fimijun は「しむ」に対応する「母の言葉」であり、後者の sun は「す」に対応する院政時代以後に流入してきた「父の言葉」であるとする。奈良朝期に「しむ」のあるところへ、平安朝期になって「す」が発達し、これが沖縄へ移入されたとみるのである。また、沖縄には「月」をあらわす本来の語はなかったが、ſimutſitſi（11月）ſiwaſſi（12月）などは現在の首里方言でも普通に使われ、和名の「しもつき」「しはす」を取り入れた「父の言葉」であるとする（注3）。

伊波先生の「父の言葉」「母の言葉」をかりるまでもなく、琉球方言では過去に語の借用が幾度となく行なわれ、現在、これらが層をなして存在している。そして、島と島との交流の度合によって語の地理的なひろがり方も異なり、さらに語ごとにその様相が異なるから、結果的に島ごとの方言特徴の差も大きなものになっている。現在みられる琉球諸方言の多様性は、このような文化史的な発展とかかわって形成されたものとみられる。

現在の琉球諸方言の構造を明らかにし、また比較方言学的に諸方言を比較することによって、上記のような言語の発展過程を明らかにするこ

とができるものとする。特に全琉球にわたる分布図は有力な資料となり、言語学的にも、文化史的にも、多くの問題を提起してくれるものである。

ここでは首里方言を琉球諸方言と比較する中から、この方言の形成と発展のいくつかの面についてふれたい。

3. 人称代名詞について

首里方言の人称代名詞はどのように形成されたか。

現代の首里方言の自称と対称の単数に限って言えば、

自 称	対称（普通）	対称（敬語）
wan(waː)	?jaː	naː
		?undʒu

のような構造になっている。対称（敬語）にウンジュを有しているのが特色である。その複数

wattaː	?ittaː	nattaː
		?undʒunaː
		?undʒunaːtaː

である。

琉球の主な方言では、どのようなすがたになっているか。次にそれを比較しよう。

奄美大島北部の佐仁では、

自 称	対称（普通）	対称（敬語）
wan	?jaː	nan（単数）
wakja	?jakja	nakja（複数）

である。対称の敬語は nan であり、首里のウンジュ ?undʒu に対応する形は用いない。

奄美大島南部の古仁屋では、

wan	?ura	nam
waːkja	?urakja	naːkja

である。対称として ?ura があらわれ、佐 仁

の ?ja: と対立する。

奄美大島の北部は佐仁と同類のすがたであり、瀬戸内町を中心とする南部は古仁屋と同類のすがたである。

徳之島の山では

wan	?ja:	?ui
wakkja	?jakkja	?uita

である。この方言では対称（敬語）として ?ui が用いられるところに特色がある。これは本来、対称の *ore に対応するもので、敬称へと発達したものであろう。敬称の na: は未だ用いられていない。

徳之島の多くの方言では対称は、奄美大島北部と同様に ?ja: が用いられるが、伊仙方言などでは ?ura が用いられている。

喜界島の志戸桶では、

wan (wanu) da:	da:
wa: kja	danna:
	na: mi
	na: kja

である。この方言では、対称として目下・同輩・目上の別なく da: を用いることができるが、特に目上に対しては na: mi を用いることができる。da: が本来のもので、na: mi は移入したものであろう。

沖永良部島の上城では、

wanu	?ura:	nata
wakja	?ukja	natata

である。対称には ?ura:（目下）と nata（目上）が用いられる。nata は単数、natata は複数である。沖永良部島の国頭、新城方言などでは、同輩に ?ui（単） ?uita（複）を用いる。

与論島の茶花では、

wanu	?ura	?ure:
------	------	-------

wa: tʃa	?uratʃa	?ure: ta:
---------	---------	-----------

である。この方言では、対称の敬語は ?ure: であり、na 系は用いられていない。これは徳之島の ?ui などと同類の構造である。

沖縄北部の伊平屋島では、

wan	?ja:, ?ura	?uga, ?undʒu
watta:	?itta:, ?urata:	?ugata:, ?undʒuna:

である。この方言では対称が二形併存している。普通態としては ?ura があるところへ ?ja: を取り入れ、敬語態としては ?uga があるところへ ?undʒu を取り入れたものと推察される。

沖縄北部の安波では、

wan	?ura	nan, ?undʒu
wakke:	?uri:	nanne:, ?undʒuta:

である。対称（敬語）は nan と ?undʒu を用いる。

沖縄南部の糸満では、

wan	ja:	na:
watta:	?itta:	nitta:

である。

宮古島の平良では、

ban	vva	vva
banta	vvata	vvata

である。対称は敬語が発達せず、目下・同輩・目上の別なく vva を用いる。na 系は用いない。

?undʒu 系は首里方言（沖縄方言）という理解のもとに用いることもあるが、宮古方言ではない。

宮古島の多くの方言は平良方言のようなすがたである。

宮古の伊良部島伊良部では、

?a? a	ja:	ja:
panti	iti	iti

である。この方言では対称として目上・目下の別なく、ja: が用いられる。宮古大神島では、

anu	vva	vva
-----	-----	-----

anta vvataː vvataː

である。八重山の石垣では、

banu wanu wanu
bandaː wadaː wadaː

である。対称の敬語が発達していない点は宮古の方言と同類である。竹富島では、

banu waː waː
banaː baʃaː baʃaː

である。黒島では

ban uva uva
banta uvata uvata

である。西表島租納では

banu ura ura
paŋkja usakja usakja

である。対称として urandza(単) urandzakja を用いることもある。敬語は発達していない。

波照間島では

banu daː daː
bema daima daima

である。

与那国島の祖納では、

anu, banu nda, ndi nda, ndi
banta ndinta ndinta

である。自称として anu系と banu系が用いられる点に特色がある。対称は敬語が発達していない。

琉球諸方言の自称には、a系と wa系がある（分布図「わたし」「わたしたち」参照）。

（イ）a系の方言

与那国、宮古伊良部、宮古大神島、
沖縄北部瀬底

（ロ）wa系の方言

wan 沖縄本島全域、奄美大島、徳
 之島、喜界島

wanu 沖永良部島、与論島

waniː 沖縄北部名護

ban 宮古島、多良間島、八重山黒島

banu 八重山諸島

wa と ba は音韻的な変化にすぎない。

以上の分布から琉球方言の自称の代名詞として a系と wa系とが併存していたことが推察される。したがって祖形として *a と *wa をたてることができよう。現在でも沖縄北部瀬底島方言はこの両形を有している。これらのすがたは奈良朝期中央方言の「あ」「わ」の併存のすがたおよび現在八丈方言のすがたに対比されよう。

首里方言のすがたは a系が衰退し、もっぱら wa系を用いるようになったものと推察される。

琉球諸方言の対称の普通態（目下と同輩）は ora系である。（分布図「おまえ」参照）

?ora 奄美大島与路島

?ura, ?uraː 沖縄北部、伊是名島、伊平屋
島、与論島、沖永良部島、奄美大島南部、
八重山西表租納

?raː 沖縄北部伊江島

nda 与那国島

daː 奄美喜界島

?jaː, jaː 沖縄中南部とその属島。奄美大
島北部、徳之島、宮古伊良部島伊良部

vva, vvaː 宮古諸島

uva, uwa, waː, wanu 八重山諸島

以上の語形から祖形をたてると *ore + a となる。a は親愛をあらわす接尾語である。

現在の諸方言の形は次のような変化過程によって説明される（注4）。

*ore + a → ora → ?ura → ?raː

*ore + a → ora → ?ura → ?ida →
daː → ndaː

*ore + a → ora → ?ura → ?ira → ?ija
→ ?ja: → ja:

*ore + a → ora → ura → vva (:))
vva (:) → uva → uwa → wa (:))

以上によって、首里方言の ?ja: は *ore + a からの変化形であることがわかる。複数形が ?itta: であるのをみると、語頭音は ?i に変化してからその母音を脱落させていったと思われる(注5)。

琉球諸方言の対称の敬語態は ore 系と na: 系と ?undgu 系である。(分布図「あなた」参照)

(イ) ore 系の方言

?ui 徳之島の松原, 山, 天城, 亀津
?uri 徳之島の伊仙
?ure: 与論島

以上の方言では敬語態として ore 系が用いられるが、沖永良部島では同輩に対して ?ui が用いられる。

(ロ) na: 系の方言

nan 奄美大島北部
nam 奄美大島南部瀬戸内町
na: mi 喜界島, 沖縄北部
nata 沖永良部島
na: 沖縄本島とその属島

na: 系は奄美大島, 喜界島, 沖永良部島, 沖縄本島とその属島に限られる。

(ハ) ?undgu 系の方言

沖縄本島とその属島

?undgu 系は奄美大島や先島にはひろがらない。

琉球方言の中には対称の敬語態が発達せず、普通態と同形を用いる方言がある。それは宮古諸方言と八重山諸方言である。たとえば平良では目下・同輩・目上すべてに対して vva を用いる。

以上のすがたから、対称の敬語態は琉球方言には本来存在しなかったものと推察される。すなわち、祖形は普通態と敬語態とが未分化の状態ですべて *ore を用いていた。そこへ親愛をあらわす a を付加して *ore + a が普通態として発達し、本来の *ore は敬語態へと発達していった。このような形から発達してできたのが現在の徳之島方言のようなすがたであろう。

na: 系は、本来未分化の琉球方言に敬語態として本土系の語を取り入れたものであろう。その分布が奄美・沖縄の一部の島に限られているのをみると、さほど古い層でもないようである。

ウンジュ ?undgu は本来土族語として用いられたらしく、沖縄本島とその属島に限られている。この種の語こそ首里方言と呼ぶにふさわしい。

対称をあらわす語の推移は、待遇関係が未分化の状態ですべて *ore であった琉球方言本来の構造の中に na: を取り入れ、さらに身分制度の発達に対応して ?undgu を生み出していったものと推察される。いったい、ウンジュの語源は何であろうか。

従来、ウンジュは「御所」「思胴」「御胴」と関係して論ぜられてきた。

これらの説は、かならずしも十分に説得力のあるものとは思われない。これまでの琉球方言のすがたとその発展から推察すると、ウンジュ ?undgu は *ore + no + sju からの発達と見るべきであろう。*ore は本来的な対称の語であると同時に、指示代名詞の近称のウリとも通じる語である。*sju は『おもろさうし』で「しゆ」「しよ」(主)と表記されている語である。

以上を要するに、琉球方言の人称代名詞の祖体系を示せば次の通りである。

〈A〉	自称	対称
	*a	*ore
	*wa	

この体系では、対称の待遇価が未分化の状態である。宮古・八重山の方言はこの形から発達したものであろう。

〈B〉	自 称	対称（普通）	対称（敬語）
	*a	*ore + a	*ore
	*wa		

この体系は、対称に親愛をあらわす a を付けることによって待遇価を生み出して分化したものである。徳之島方言は、この形から発達したものであろう。

〈C〉	自 称	対称（普通）	対称（敬語）	
	*a	*ore + a	*na:	}（平民）
	*wa			
	*a	*ore + a	*ore + no + sju	}（土族）
	*wa			

この体系は〈B〉を基本にし、敬語として na: を取り入れさらに、すでに述べた語構成によって ?undʒu を派生させて待遇価をより複雑にしていたすがたである。

首里方言の人称代名詞の構造は〈C〉のような形から発達したものであろう。この形は首里王朝における身分制度の確立と符合して発達してきたものと察せられる。

では、「おもろ」時代の人称代名詞はどうか。それは次のようになっている（注6）。

自 称	対称（普通）	対称（敬語態）
△あ△あん	△おか	
○あ○あん	○おが	○な
△わ△わん		
○わん		

（△印は『おもろさうし』の例、○印は『混効験集』の例）

「おもろ」時代に、「な」が存していることは注目すべきで、当時はすでに〈C〉の段階まで発達していたものと推察される。

4. 首里方言の波及と定着

首里王朝を背景に、首里方言が周囲にどのように波及し、これが定着していったかについて、その度合を語の分布状態からみれば、およそ次のようになる。「言語と文化の波及地図」参照。

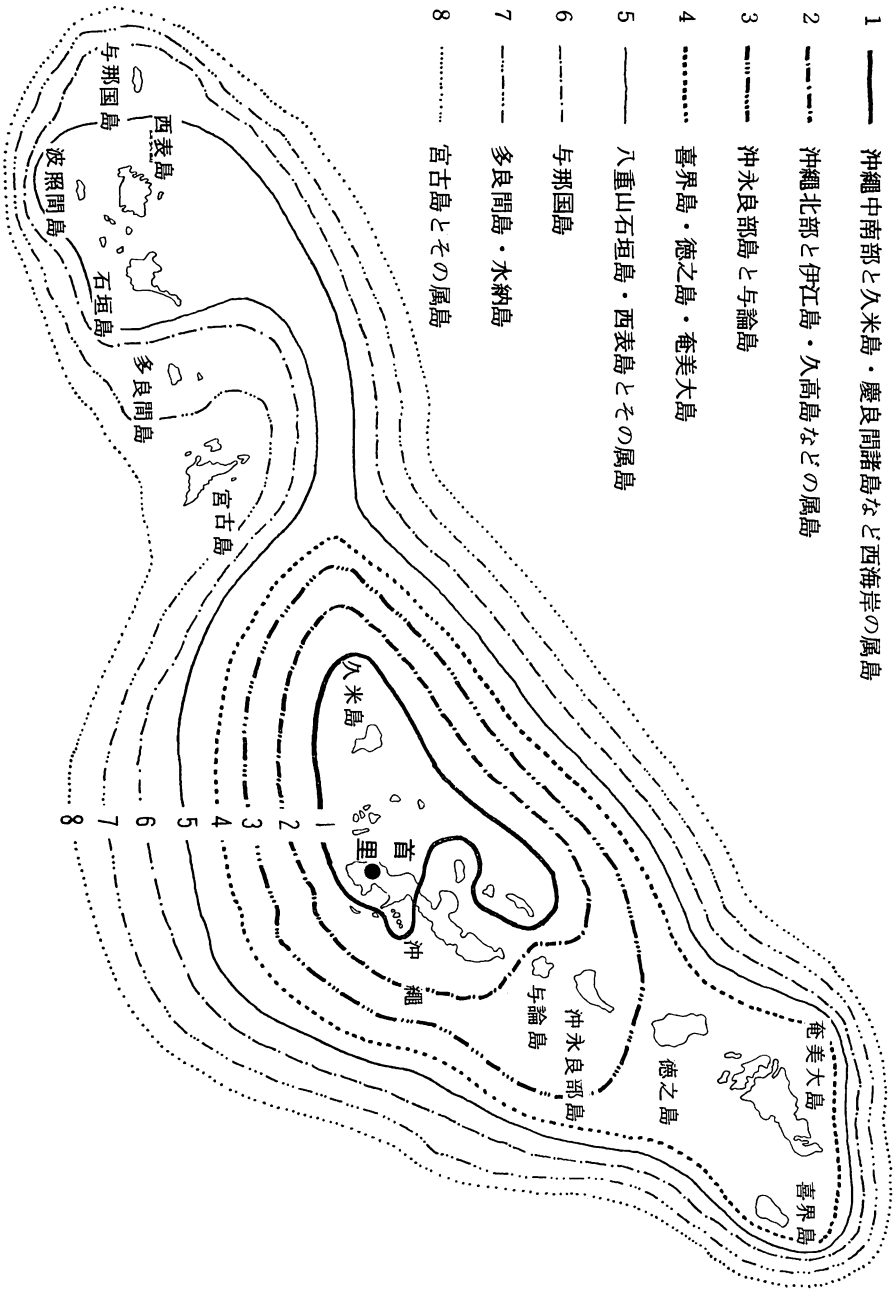
- （1） 沖縄中南部と久米島・慶良間諸島など西海岸の属島
- （2） 沖縄北部と伊江島などその属島
- （3） 沖永良部島と与論島
- （4） 喜界島・徳之島・奄美大島
- （5） 八重山石垣とその属島
- （6） 与那国島
- （7） 多良間島・水納島
- （8） 宮古島とその属島

この順は首里文化の影響関係の度合を示すものでもあり、（1）が最も強く、（8）が最も弱い。これは、文化交流史的にみた琉球方言の区画でもある。

首里王朝が成立してから琉球列島に語が進入するときには、ひとつの大きな傾向がある。それは、まず沖縄中南部地域に新語を取り入れるということである。そして、そこを中心に周辺へひろがっていった。ひとつは、沖縄北部および奄美地域へ北上するものがあり、ひとつは、八重山地域および宮古地域へ南下するものがある。しかも、島伝いにひろがるものばかりではなく、語によってはある島をとびこしてひろがっていくものまである。

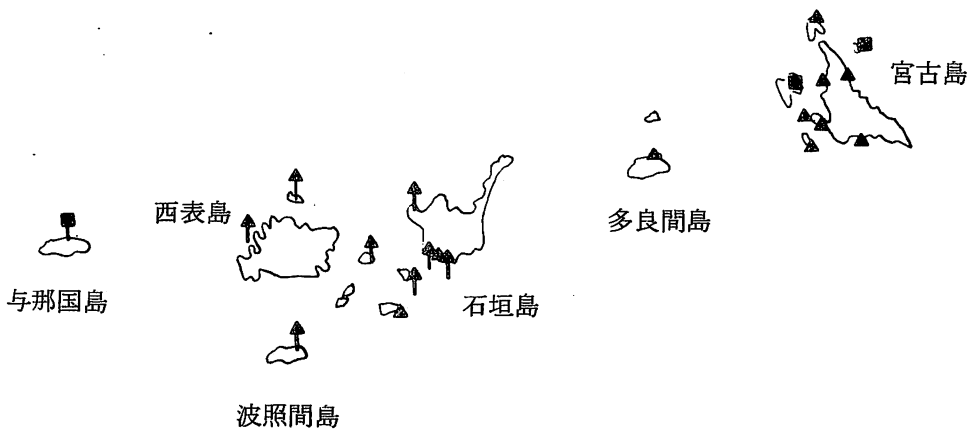
琉球列島に語が進入するときには、このように島伝いに「北上する」とか「南下する」とか単純に言えないことはもちろんである。

首里王朝の言語と文化の波及地図



わたし

● wan	↑ wanu	● wani
▲ ban	↑ banu	
■ a	↑ anu	

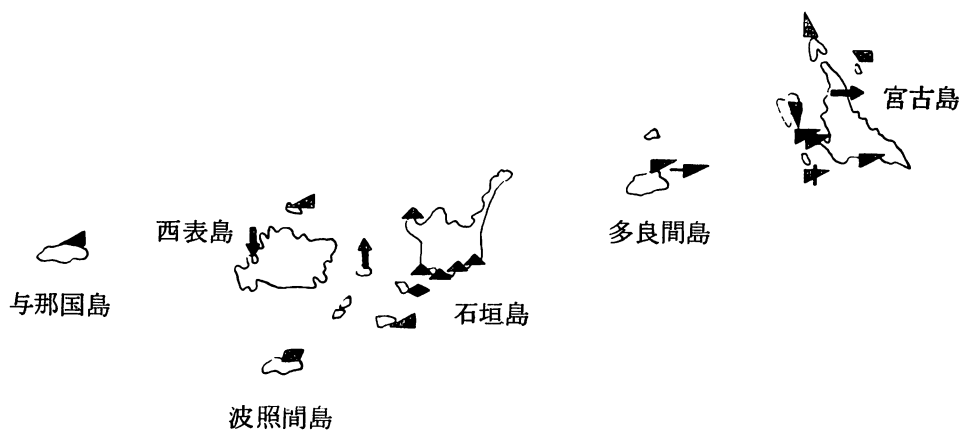


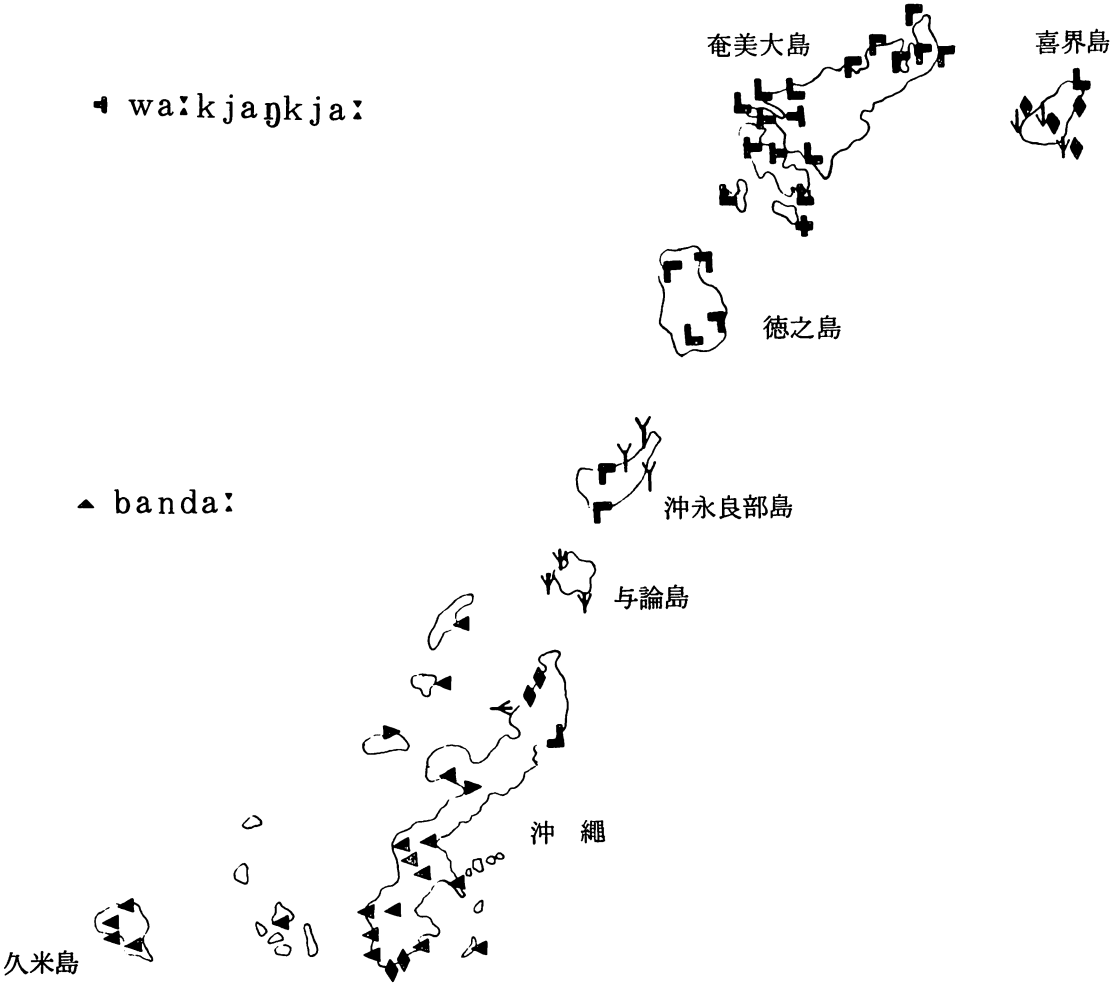


琉球方言分布図 1

わたしたち

┐ wakja	└ wa:kja	✚ wakja:	┘ wa:kja:
┐ wakkja	└ wakke:		
┐ watja	└ wa:tja	↓ wa:ttja:	← wa:tsa:
┐ watta	└ watta:		
◆ wanna:			
↑ ɸaka	↓ paŋkja	→ бага:	
└ banti	┐ panti		
└ banta	┐ banta:	✚ ɸanta:	→ be:ta
◆ bana:	■ bema		
■ anta			

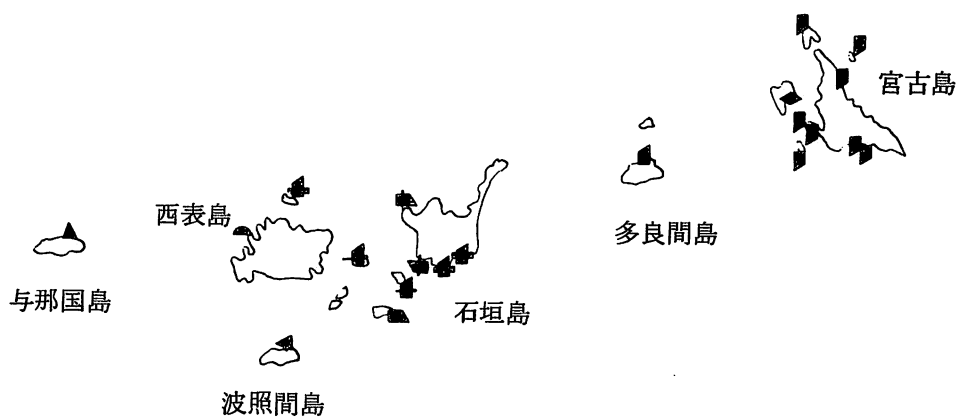


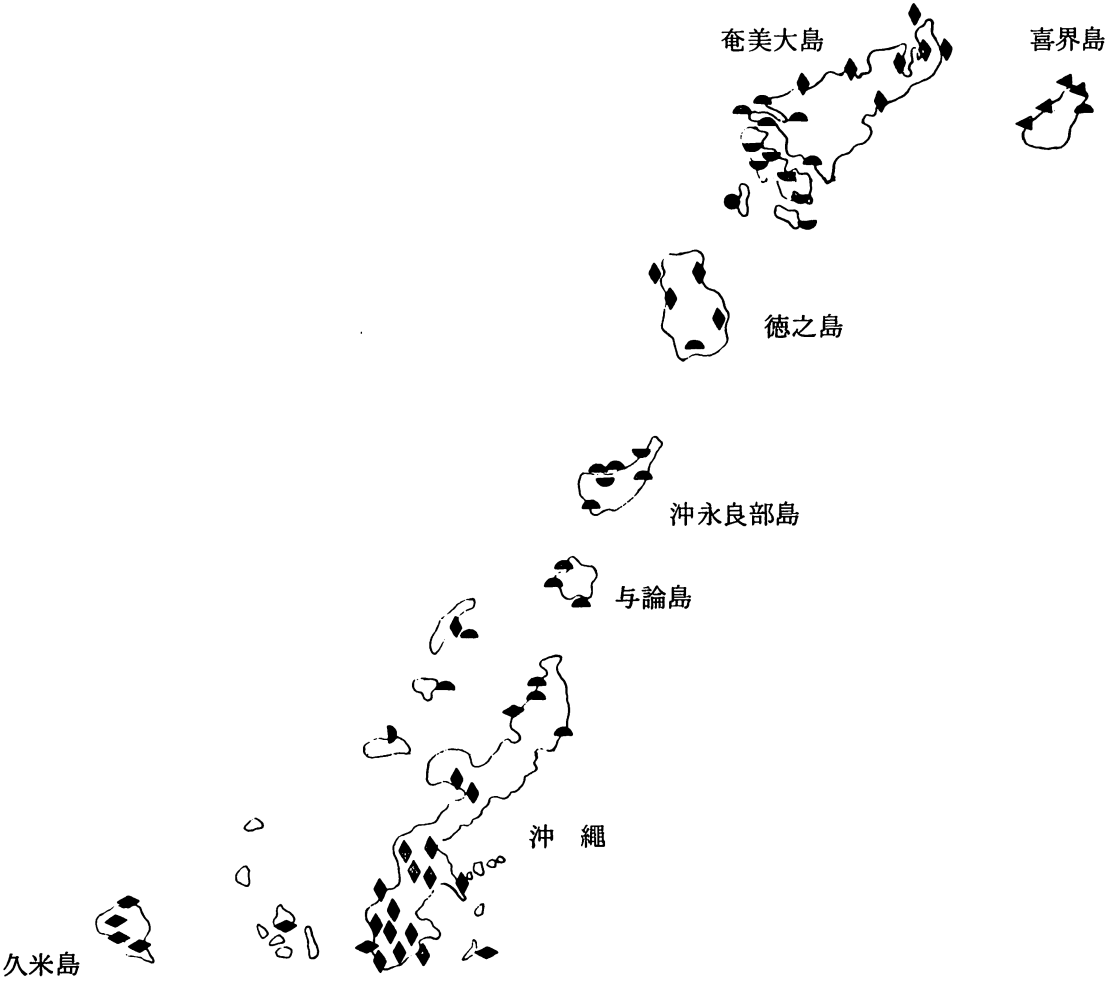


琉球方言分布図 2

おまえ

• ʔora	◡ ʔura	◡ ʔuraʔ	◡ ʔraʔ
▲ nda	◡ daʔ		
◆ ʔjaʔ	◡ jaʔ		
◡ uva	◡ vva	◡ vvaʔ	
◡ uwa	◡ waʔ	◡ wanu	

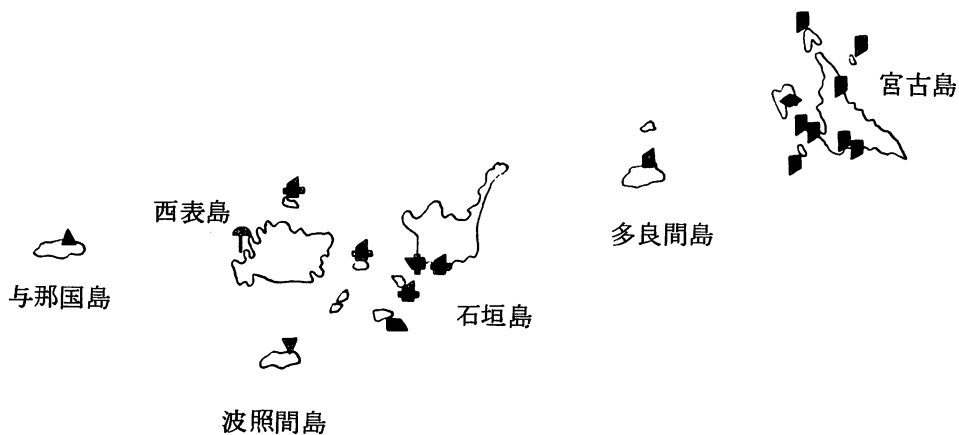


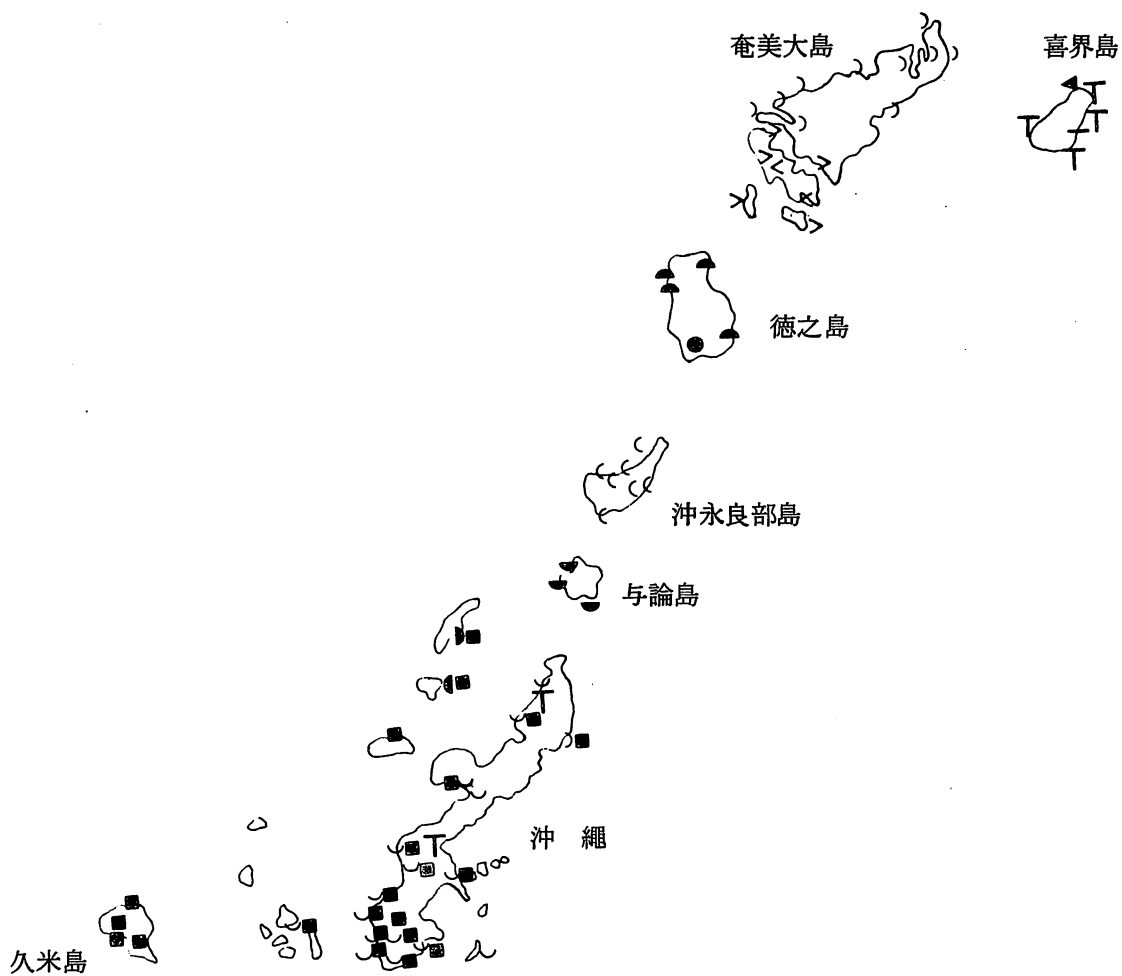


琉球方言分布図 3

あなた

τ naꞌmi	— naꞌme	! naꞌmeꞌ
> nam	< naꞌm	
› nan	˘ naꞌ	˘ nata
• ʔuri	↑ ura	˘ ʔure(ꞌ) ˘ ʔui
◦ ʔuga	◦ ʔugaꞌ	
▲ nda	◀ daꞌ	▼ ḡaꞌ
■ uva	♯ vva	♯ vvaꞌ
♣ wanu	♣ waꞌ	
◆ jaʔa		
▪ ʔundʒu		





琉球方言分布図 4

注 1. 比嘉春潮『沖縄の歴史』沖縄タイムス,
1960年

仲原善忠『琉球の歴史』文教図書,
1978年

注 2. 中本正智「沖縄南部の1・2音節語の
アクセント」『国語学』41, 国語学会
1960年

注 3. 『伊波普猷全集』第4巻平凡社, 371
ページなど, 1974年

注 4. 中本正智『琉球方言音韻の研究』法政
大学出版局, 1976年

注 5. 服部四郎『日本語の系統』岩波書店,
288ページ以下, 1959年

注 6. 仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞
典総索引』角川書店, 1967年

外間守善編著『混効験集 校本と研究』
角川書店, 1970年

本稿は、「語の分布から見た首里王朝文化－
首里親国の文化圏－」の題で、昭和53年7月
22日法政大学沖縄文化研究所（サンシビル）
で口頭発表した原稿の中から、「人称代名詞」
に関する部分だけを取りあげて、改稿したもの
である。今後、このようなテーマで問題を深め
ていきたいと考えている。